

冬は山にありて山操やまのりといひ、夏は川に住みて川太郎といふと、或人の語りき、然れば川太郎と動物にして、所により時によりて、名の替れるものか、

〔北越雪譜 二編 四〕異獸

魚沼郡堀内より十日町へ越る所七里あまり、村々はあれども山中の間道なり、さてある年の夏のはじめ、十日町のちゞみ問屋ほりの内の問屋へ、白縮なほどいそぎおくるべしといひこしけるゆゑ、その日の晝すぐる頃、竹助といふ剛夫をえらみ、荷物をおはせていだしたてけり、かくて途も稍々半にいたるころ、日ざしは七ツにちかし、竹助まばしどぞ、みちのかたはらの石に腰かけ、焼飯をくひゐたるに、谷間の根笹をおしわけて來る者あり、ちかくよりたるを見れば、猿さるに似て、猿さるにもあらず、頭あたまの毛長ながく脊せきにたれたるが半ばまろし、丈たけは常並じょうへいの人ひとよりたかく、顔かほは猿さるに似て、赤あかからず、眼まなこ大おほにして、光あかりあり、竹助は心剛こころごうなる者ゆゑ、用心よこしまにさしたる山刀やまのやいばを提ひよらば、斬きんと身みがまへけるに、此こゝものはさる氣色きしきもなく、竹助が石の上におきたる焼飯やきいに指さし、くれよと乞こふさまなり、竹助こゝろえて投なげれば、うれしげにくひけり、是こゝにて竹助心をゆるし、又もあたへければ、ちかくよりてくひけり、竹助いふやう、我われはほりの内より十日町へゆくものなり、あすはこゝをかへるべし、又やきめしをとらすべし、いそぎのつかひなれば、ゆくぞとて、おろしおきたる荷物にせをせおはんとせしに、かのも荷物にせをとりて、かるく、とかたにかけ、さきに立てゆく、竹助さてはやきめしの禮れいにわれをたすくるならんと、あとにつきてゆくに、かのものはかたにも、のなきがごとし、竹助は嶮岨あやふちの道も、これがためにやすく、およそ一里半あまりの山みちをこえて、池谷村いけやちかくにいたりし時、荷物にせをばおろし、山へかけのぼる、そのはやき事風ことかぜの如くなりしと、竹助が十日町の問屋にてくはしく語りしとて、今にいひつたふ、是こゝは今より四五十年以前こゝの事なり、その頃は山かせぎするものをりく、は此異獸こゝを見たるものもありしとぞ、